

1

小説 峰崎龍之介  
イラスト 馬克杯

ダンジョン  
暮らしの

A former brave resident in the dungeon.



勇者

試し読み版

# contents

A former brave resident in the dungeon.

story by ninesaki ryuoukaku and illustration by moogap

一章	追われて逃れて	005
二章	いざ、ダンジョンへ	015
三章	再会と盟約	026
四章	信を用いて契りと成す	038
五章	目指すはエロダンジョン！	059
六章	冒険者、落とし穴の底にて	072
七章	女戦士、晒し台にて	096
八章	追撃の麗人騎士	146
九章	ダンジョン、レベルアップ！	160
十章	麗人騎士の受難	171
十一章	どっちがイクでショー	215
十二章	外道騎士カトレア	227
十三章	勇者の片鱗	238
十四章	外道の報いと、哀れな麗人	253
十五章	墮ちる心と、淫らな復讐	280
十六章	外道の末路	313
十七章	決着のあと	340
番外編	アキエスの人形	350

## 一章 追われて逃れて

囲まれている。

深夜に目覚め、そのことに気づいた瞬間。ブラムは思わず舌打ちをした。

とある森の質素な小屋。

その周りに、剣呑な<sup>けんどん</sup>気配がいくつか迫っていた。人数は定かではないが、ひとりやふたりということはないさそうさ。

(……またかよ。これで何度目だ?)

うんざりと嘆息する。それから静かに上体を起こした。その間にも、殺気立った気配はじりじりとこちらに近づいている。

(……まずいな。この感じだと、もう仕掛けてくるんじゃないかねえか?)

ブラムは息を殺して寝台から降りると、手探りで剣帯を手を取った。慌てずゆっくりと腰に固定する。それからまた手探りだ。愛剣——聖剣と呼ばれる、かつ

て魔王すら両断した一振りを剣帯に固定する。

ちよūdōその時だった。剣呑な気配の中からとりわけ強力なものがひとつ、ゆっくりと小屋に近づいてきた。

(……いまからじゃ脱出は無理だ。迎え撃つしかない)

ブラムが二度目の舌打ちをすると、扉がノックされた。荒々しく無遠慮な音。

「鍵ならついてないぜ。入りたければ入りな」

あえて扉には近づかず、遠くから応じた。迎え入れた瞬間に腹をぐさりとという展開も、ない話ではない。返事はなかった。代わりにゆっくりと扉が開いていく。向こうも警戒しているのかもしれない。

開いた扉の向こうには全身を鎧で覆った誰かがいた。兜で顔を覆っているので性別すらわからない。それどころか鎧の材質すら見て取るのは難しかった。今夜は満月だが、流石に森の奥まで照らすほどの光量はないようだった。

「ブラム・デイルモンドだな」

無遠慮な鎧の訪問者が、低い声でそう言った。凛々

しい青年とも、ハスキーな女性とも取れる曖昧な声だ。  
（ツラ拌むまで正体は不明かな。……これまでの経験からすると、騎士ではあるんだらうが）

推測を脳裏に浮かべる。ブラムは現在とある事情によつて、多数の人間から命を狙われていた。そしてその多くは正規の訓練を受けた王国の騎士たちだった。

「よくわかつたな。こんな暗さじゃ背格好しかわからんだらうに」

劍の柄に手をやりながら答えた。同時にやや左足を引き、いつでも抜き打てるように気を張る。そうしながら、探るように問いを放った。

「……で、そういうあんたは？」

「残念ながら、名乗ることは許されていない」

騎士はさほど残念でもなさそうに言った。ブラムは小さく鼻を鳴らした。

「は、そいつはご挨拶なことだな。こんな時間に押しかけた拳句、名乗りもしねえとは。……周りで殺気を撒き散らしているお友達も含めて、失礼な話だ」

言うど、騎士はびくりと肩を動かした。感心したよ

うに言ってくる。

「……ほう。気づいていたか。流石は『勇者』ブラム。魔王を討つただけのことはある」

ブラムはその言葉——『勇者』という言葉に眉を寄せた。一見輝かしい称号だが、いまのブラムには皮肉にしか聞こえない。騎士は更に言葉を続けた。

「だが……それも過去の話。いまの貴様は鼠だ。追い回され、泥に塗れるドブ鼠……」

「ああそうかい。ならこんな辺境で鼠を追い回してるあんたはなんだ？ 俺がドブ鼠ってこたあ、差し詰めドブ浚いの下男げなんか？」

「……貴様」

騎士は激昂したようだった。怒鳴ったわけでも表情が見えたわけでもないが、怒りの気配が指先に現れている。

（言い返されて震えるほど怒るなら、いらんこと言わなきゃいいのにな）

いくら溜飲の下がったブラムは、静かに嘆息した。対する騎士は震える指先を腰元に——劍の柄に触れさ

せている。

いよいよ来る——そういう状況だった。だがブラムは、あえてその動きを無視した。

（ここはもう畏の中だ。見える情報は信用できない——）

ブラムは腐つても元勇者だ。その実力が過小評価されていくということもないだろう。確実に策を練ってきているはずだし、勝算があると踏んだから仕掛けてきている。ならば軽率な判断は命取りだ。

（畏の定石——派手な動きは陽動）

胸中でだけ吹き、見えている騎士から視線を外した。同時に鞘を払い、抜き身の聖剣を掲げる。聖剣の切っ先が向かうのは扉とは反対側——なんでもない壁だ。それに、騎士が声をあげる。

「なにをしている。貴様の相手はこのわたし——」

「うるせえよ」

一言で斬り捨てて、ブラムは聖剣に命令を下した。

「光よ、穿て」

声とともに掲げた剣が純白の光を放ち、部屋を白く

染めた。同時に剣の切っ先から鋭い棘のような、光の塊が射出される。その棘はそれ自身が純白に輝きながら壁に突き刺さった。

そして次の瞬間。壁に突き刺さった棘が、激烈な轟音を立てて爆裂した。粗末な木製の壁が吹き飛び、破片があちこちにばら撒かれる。

「があっ!？」

砕けた壁の向こうから悲鳴が聞こえた。少し遅れてどさりという音も聞こえる。伏兵が爆発に巻き込まれて吹き飛んだのだろう。

加減はしたから死んではいないだろうが——しばらくは動けまい。そう判断して騎士に注意を戻した。騎士は剣に手をかけただけで止まっていた。こういう対処をしてくるとは思わなかったのかもしれない。ブラムは彼——ないし彼女に向けて告げた。

「正面からひとりが姿を見せて、潜んでいる本命が急所を狙う。周囲の連中がわざわざ見つかりやすいように気配を放つてるのも、本命が既に忍び寄っているのを隠すため。……悪くなかった。相手が俺でなければ

な」

「くっ——化け物が！」

騎士は大きく吼えると、今度こそ抜剣した。その声  
が合図になったのか、小屋の周りで待機していた気配  
も一斉に動き出す。ブラムはそれに苦笑すると、騎士  
は無視して走り出した。

こんな狭い空間では、いくら聖剣が強力でも多勢に  
無勢だ——思いながら、先ほどぶち抜いた壁の方から  
小屋を飛び出した。

「いたぞ！ 逃がすな！」

「討ち取れば騎士団長も夢じゃない——俺のために死  
んでもらう！」

小屋から出た途端に、数人の武器を持った男が走り  
寄つてきた。それぞれ勝手なことを叫んでいる。闇に  
目を凝らして数を数えた。

（五人か。ちと多いが——いいさ。押し通るまでだ）

構わずそのまま前に向かって走つた。数秒後には男  
たちとすれ違ふだろう。

男たちの装備は先ほどの騎士とは少し違つていた。

剣を持っているのは同じだが、鎧が違う。目の前の彼  
らの方が軽装で、しかも兜は被つていなかった。だか  
ら男とわかつたわけだが。

兜のない軽装の剣士たち——心当たりがあつた。ブ  
ラムを狙う殺し屋の中でも最も割合の高い連中。王国  
の下級騎士だ。となると最初に現れた『兜つき』が、  
この連中の頭なのだろう。上等な鎧で身を守っている  
のは上級騎士の特徴である。

——と、そんなことをつらつらと考えた頃には。

ブラムはほとんど無意識に、男たちを斬り捨てなが  
らすれ違つていた。男たちは鎧に覆われていない関節  
部分から血を噴き出し、悲鳴をあげて地面に転がる。

いや——ひとりだけそれができない者もいたようだ。  
腕が立つのがかえつて災いして、喉を斬り裂かれて絶  
息している者が。

（ひとり殺つちまったか。もう少し弱けりや死なずに  
済んだろうが——）

眩きながら剣を握り直した。まだ戦いは終わつてい  
ない。面倒なのが残っている。

「……全員やられるとは……！」

声に振り返ると、先ほどの騎士がいた。ブラムの足元に転がっている男たちを見据えて、悔しげに呻いている。だが即座に飛び掛かってくるということはなかった。剣を握り直し、兜の奥からじつとこちらを見据えてくる。

(案外冷静だな)

騎士の行動。奇襲を看破され、仲間を斬られたにしては理性的だった。

(……その理性がもうちよい根本的なところで働いてればな。勇者を殺すには、いくらなんでも足りねえよ) 身も蓋もないことを思いながら、最後に残った騎士に鋭い視線を向けた。

「……さて。もうあんたしかいないようだが……どうする？」

「……………くっ」

騎士は息を飲み、一歩たじろいだ。だがそれでも踏み止まって、剣を構えてくる。

「……どうするもなにもない！ この任務は陛下の勅

令だ。抗うことなどできぬ！」

「……あのジジイ。ついに勅まで出しやがったか」

ブラムは騎士の叫び——追い詰められた声に、胃のあたりがムカつくのを感じた。

この半年ほど散々殺し屋を送り込まれ続けてきたが、国王直々の抹殺命令が出ているとまでは思わなかった。(しかし、これで合点がいったな。どこへ逃げても追ってくるわけだぜ)

震える手で剣を掲げている騎士を油断なく見据え、ブラムは呟いた。

その時だった。剣を構えたまま硬直していた騎士が、一歩こちらに踏み出してきた。

「策は失敗したが、わたしにはまだこの剣がある。逆賊如きに遅れは取らん！」

騎士は強い罵倒とともに地を蹴った。自らを鼓舞するような——実力差を悟ったような言い方だった。ブラムはそれに、舌打ちしつつも聖剣を構える。

「はあっ！」

騎士は鎧の重量感を感じさせない勢いで突撃してく

ると、気合の息吹を吐いて真一文字に剣を振るつた。悪くない太刀筋だが——少々素直すぎる。

靴裏を地面につけたまま、わずかにだけ後退した。白刃が胸の前を通りすぎていく。

「その意気やよし」

言いながら隙だらけの騎士を打った。剣を持っていく右腕をだ。それも鎧の隙間ではなく、箆手の上から打撃として衝撃を通す。無茶な打ち方だが、聖剣であれば刀身が折れるような心配はない。

「ぐ……っ！」

騎士が腕を打たれた衝撃で剣を取り落とし、兜の奥からぐもつた呻きを漏らす。だがブラムは容赦なく次の手を打った。剣を拾おうと動き出した騎士の足を払う。騎士はろくに受身も取れず、顔から地面に激突した。

「勝負ありだ。もうやめとけ」

眩き、聖剣の切っ先を騎士に突きつけて——そこでふと気づいた。騎士の兜がなくなつて、素顔が見えてくる。転倒した拍子に留め具が外れでもしたか。

「ん？ お前……」

見えた騎士の素顔を目を細める。月光に照らし出されたのは、どう見ても女の顔だったのだ。完全に顔を上げていないが、それでもはつきりわかるほどの美女だった。燃えるような赤毛が、月明かりでも鮮烈に映えて見える。

どうやら歳も若いようだ。二十代前半といったところだろう。これに先ほどから聞こえるハスキーな声に加われば——なるほど、麗人騎士のでき上がりだ。

「……女だったのか。まあ、最近じゃ女騎士つても珍しくはねえのかな」

言いながらも、突きつけた切っ先を逸らしはしなかった。敵には平等に恐怖と傷、場合によっては死を与えるのがブラムの流儀だ。

なにせこちとら、人生の全てを魔王の殺害に捧げている。女性だから手を抜こうなどという文化は、そもそも芽生えてすらない。

そんなことを考えているうちに、女騎士がふらふらと顔を上げた。意志の強そうな太めの眉と、それに反





する雰囲気の泣き黒子が同居していた。状況によって受ける印象が変わりそうな女だと、場違いな感想が思ひ浮かぶ。

そして——どうやらこの場合は、泣き黒子が映える展開になりそうでもあった。

「ひっ……」

眼前に死の気配——凶器を向けられて、女騎士は喉を引きつらせたようだった。案の定恐怖で眉が寄り、泣き黒子が弱々しさを引き立てている。

「あ、あああつ！」

彼女は弾かれたように顔を上げ、死の恐怖から遠ざかろうとした。だが足が上手く動かないのか動きがひどく緩慢だった。それでも手足は動き続けている。冷徹に眉間を捉え続ける聖剣の切っ先が、彼女の心を折りにかかっていた。

「ま、待て……！ 頼む、待ってくれ！」

彼女はあからさまに狼狽して叫んだ。兜から解放された赤毛が汗で額に張りついているが、気にした様子もない。

それを淡白な目で見やりながら、告げた。

「待てと言われてもな。いきなり殺しにかかつてきたのはあんただ。話し合いの余地もなくな。それが自分の番になったからって命乞いするのは、ちよいと筋が通らなくねえか？」

一歩進んだ。剣の切っ先を女騎士の眼前に突きつけたまま。

「あ、ああ……」

彼女は怯えきつた表情で、ずるずると尻を地面にこすりつけて切っ先から逃れようとする。虫が這うかのようだ。

「騎士なんだろう？ 勅命を受けて遙々やってきた殺し屋なんだろう？ なら、それなりの覚悟を決めな。——あんたの死は、もう避けられない」

ブラムは殊更ことさらに酷薄な調子で、女騎士の死を宣告した。目を細め、いよいよ斬るぞと視線で伝える。

すると——

「ひっ……ひぐっ」

女騎士はいよいよしゃくりあげて泣き始めた。切っ

先から目を逸らすことはできないまま、ぼろぼろと涙が頬を伝う。

——それどころかよく見ると、彼女は失禁していた。恐怖が限界を超えたらしい。

情けない醜態だ。しかし彼女を責めるのは酷な話だった。彼女を追い詰めたのは、魔王すら屠った最凶の殺戮者なのだ。

(……こんなところか)

完全に折れた——判断して剣を引いた。

流石に殺す気は失せていた。戦闘中に弾みで頸を刎ねるのは仕方ないが、抵抗する意気地のない者——しかもベそを搔いて失禁している者を殺す趣味はない。

「ひう……う……」

——と、女騎士が後ろ向きに倒れた。急に死の気配が遠ざかったことで、張り詰めていたものが切れてしまったのか。そのまま、仰向けに転がって動かなくなる。どうも気絶したらしい。それを見やうから、ブルムは静かに聖剣を鞘に収めた。小さく嘆息する。

(——半年前までは、聖剣で魔王とやり合ってたんだ

がな。王都に凱旋した時は称えられもした。それが——)

思考を一度止め、気絶した女騎士へと視線を送る。失禁は止まっているが、情けない水溜まりは既に大きくなっていった。

(——それがいまじゃ、女を脅して失禁させるとはな。元からガラじゃないとはいえ、勇者のやるこつちやねえよ)

自嘲気味に呟いて、苦笑した。それから頭を振り、思考を切り替える。

これからどうするか。まずはこれを考えなければならぬ。

(暗殺部隊が国王の勅で動いてることは、これで打ち止めって線はない。この隠れ家は知られちゃったし、またどこかに隠れなきゃならねえが)

小屋に向かつて歩き始めながら、声に出さずに呟く。可能な限り素早くこの場を離れなければならないが——残念ながら、行く先の当てはなかった。

(……国境を越えて帝国にでも亡命するか？ いや、

どつちにしろ勇者の名を政治に使われるだけか。くそ、なにが勇者だよ馬鹿が。厄介ごとばかり運んできやがるんじゃ、疫病神と大差ねえぞ)

呻くように毒づく。思考が悪い方に空回っているのは自覚していたが、それで止まるものでもなかった。

(……王国内も帝国も駄目となると、大陸自体から逃げるしかねえが……港なんざ真つ先に張られてるだらうしな。ああ、面倒くせえ。多少不便でもいいんだ。とにかく安全なところはねえのか?)

無茶な思考だった。ブルナム大陸はもう三百年近く、キエト王国とザヴァク帝国が二分して治めている。大陸中のどこにしようが、どちらかの目に留まってしまおうだろう。

(——待てよ?)

ふと歩みを止めた。なんとなしに聖剣の柄を弄りながら、呟く。

「……魔王の野郎が引きこもつてた地下迷宮……」

ブラムが思い浮かべたのは、両国の国境線を跨いで存在しているかつての魔王の本拠地だった。悪意ある

トランプ  
畏と、殺意に満ちた魔物がひしめく魔の領域。

あの場所の最奥であれば、そうそう暗殺者どもも近寄れないだろう。

「……あそこなら、いけるか?」

思いつきに、半信半疑の心地で夜空を見上げた。魔王を殺害して以来、あのダンジョンには立ち寄っていない。だからいまの状況はまったく言っていないほど知らないのだ。もしかしたら魔王の死によって、単なる迷路と化しているかもしれない。

「その場合、不便だけで隠れ家としての価値は低いが……いや。まずは行こう。どつちにしろ、他に行くところなんざねえしな」

ブラムは呟き、ひとり領いた。続けて苦笑する。

——暗殺者に襲われない。それだけを求めたささやかな住処。かつて大陸を救った勇者の安住の地。もしもそれが、魔王の造つたダンジョンであるのなら。

(——皮肉にしても、きつい話だな)

そこまで考えたところで、苦笑を引つ込めて嘆息した。いやに重い嘆息だった。

## 二章 いざ、ダンジョンへ

森の隠れ家で女騎士に襲撃されてから数日後。ブルムは旧魔王軍の本拠地——ダンジョンのすぐ近くにいた。

「相変わらず無闇とでかいな」

巨大な地下への階段を眺めやり、ふと呟く。

このダンジョンはいわゆる地下迷宮であり、地上から確認できるのはほんの序章——入り口部分だけだ。

そして王国側と帝国側にひとつずつあるこの巨大な階段は、いくつかある入り口の中でも正規のものと認識されていた。他にもダンジョンに繋がっている洞窟などもあるにはある。しかしそれを使うと魔物の巢の真っ只中に落ちたりするため、概ね敬遠されていた。

「さて……行くか」

足元に置いていた荷物——数日分の保存食を入れた背負い袋を担ぎ、ゆっくりと歩き出した。薄暗いダン

ジョンの入り口に足を踏み入れる。

「……食われてるみたいだな」

一段ずつ階段を踏みしめていると、ふとそんな感想が浮かんだ。

この階段はあまりに巨大で、まるで口のように思えるのだ。ダンジョンという巨大なモンスターが開いた口。

（なら俺は……自ら食われにかかっている愚かな獲物か）

思い浮かべた感想に苦笑した。以前はこんな馬鹿げたことは考えなかった。

（……我がことながら肝が小さいな。まあ、前はひとりじゃなかったからな）

かつてこのダンジョンに挑んだ時には、仲間がいた。キエト王国とザヴァク帝国、両国から選ばれた精鋭たちが。

聖騎士ヴィオーラ、魔導師アルカノン、祭司ノア。そして聖剣の担い手ブルム。このチームで三年という時をかけてダンジョンを攻略し、魔王を殺害した。

それがもう半年前のことだ。

だがその仲間たちはもうこの場にはいない。それぞれ自身の職場に戻り、その任をまっとうしているだろう。

（自分の居場所があるってのは——いいもんだよな）  
ないもの強請り。それはわかっていた。それでも居場所を欲したからここに来た。

（……行くしかねえ。進んだ先になにもないとしても、もう俺には……行くところなんかないんだ）

暗くなりつつある思考を、頭を振って追いついて。ブラムは暗く陰鬱なダンジョンへと進んでいった。



——ダンジョンは地下二十五階まで続いている。少なくともブラムが最奥に到達した半年前まではそうだった。

二十五階。数字にするとそれほど多くは感じないが、実際に地下に潜るとそうも言っていられないのが事実だった。

理由はいくつもある。

まずそもそもダンジョンの面積が広い。測ったわけではないし階層によってばらつきもあるが、最小の階でも王国の宮殿と同等の広さを持つ。最大の階では、下手をすると城下町に匹敵しかねない広さだ。そしてそのただっ広い面積の中で、次の階に下りる道はたったひとつしかない。そこは、複数ある入り口と違ふところだった。

いや、もう少し正確に表現するならこういう言い方になる。

『最奥に辿り着ける正解の道がひとつしかない』と。次の階に下りるだけなら、実のところ抜け道はいくらあつた。だが正解以外の道を進んでも、たいていそこで行き止まりになっていたり、最悪の場合は致死の罠が待ち構えている。

加えて階層の節目には強力な守護者が門を守る『訓練の間』なども存在していて、侵入者の進行をいちいち阻んでくる。実力者が揃った魔王討伐隊でも、最奥に辿り着くのに三年かかったのはそのせいでもあつた。（慎重に道を見定め、細心の注意を払って進まなけれ

ば簡単にくたばる。そいつは俺だつてそうだ。油断はできない……)

——というのが、ブラムの記憶しているこのダンジョンの特徴だった。



……だったのだが。

「どうなつてんだ、こりゃ」

ブラムは目の前の光景をいまいち飲み込めず、洗面で眩いた。

松明代わりに使っている聖剣——命じれば無闇と光るので便利なのだ——が放つ光は、異様な光景を照らし出していた。

「……尻だよな。これ」

そう、尻だ。ダンジョンの妙につるつるした壁から、どういうわけか人間の尻が生えていた。下着すらつけていないむき出しの尻である。股間からいちもつがぶら下がってはいないので、どうやら女の尻のようだ。

「いや、だからつて納得できる要素でもないが。なんだつて女の尻が生えてんだよ？」

疑わしい心地でしゃがみ込み、顔を近づけてよく観察してみる。

とはいえ、やはり尻は尻だ。いくら見つめようがただの尻でしかなかった。強いて発見を挙げるなら、肌を感じからして若い女のものだろうというくらいか。

「……死んでるのか？」

だとすると中々のホラーだな——思いながら触れてみた。すると予想に反して、謎の尻はびくびくと震えた。どうやら生きてはいるらしい。わかったからといって、どうということもないが。

「……いや。一応他にもあるか。これは……別に壁から生えてるわけじゃないな。どっちかつつと、空いてる穴にはまり込んで抜けなくなつたつて感じだ」

言いながらふと見回すと、壁にはいくつか穴が空いていた。どうやらそのうちのひとつに、人間が頭から突つ込んでいる形のようなだ。

もしかしたらこれもダンジョンの罠のひとつなのかもしれない。だいぶ見た目は間抜けだが。

観察を切り上げて、ブラムは大方の見当をつけた。

可能性を口にする。

「盗掘屋……だるうな」

このダンジョンは大陸の中心にあり、魔力の豊富な霊脈を近くに持つ。そのため出土する鉱石は内部に魔力を溜め込んでいることが多い。それらは石の種類に關係なく、ひとくくりで魔鉱石と呼ばれている。

都市部では魔力で動く道具の需要が高まっているから、燃料になる魔鉱石はそれなりの値がつく。なのでそれを目当てにダンジョン深くまで潜り込んでくる連中はあとを絶たないのだ。半年前、魔王が存命の頃ですらたびたび見かけたほどだ。

彼らは国家から盗掘屋と呼ばれ、基本的には犯罪者として扱われている。ただし国境に跨がって広がっているというダンジョンの位置關係上、王国と帝国のどちらに裁かれるかは判然としていない。

また、勝手に危険を負って貴重な燃料を掘り出してくれるという面は利便性を見出されてもいるので、実際に逮捕される事案は実のところ少ない。

余談だが、彼ら自身は『盗掘屋』ではなく『冒険者』

と名乗ることが多かったりする。危険を顧みず魔鉱石に挑む姿を指してだ。

自己陶醉の極みではあるが、こちらの名前も案外通りがいい——一般人はこちらを使うことも多いのだ——ので、傍目には呼び名が複数あってややこしいことになっていた。

まあ、それはそれとして。

ブラムは自業自得とはいえ哀れな姿の盗掘屋を見下ろして、ぼそりと呟いた。

「……様子がおかしいよな。畏にかかっているのに魔物が殺しに來ない」

ブラムがいまいるのは、地下五階あたりだった。彼は一度このダンジョンを踏破しているので、『正解の道』を把握している。

そのためここまではそれほど時間をかけずに到達できた。多少魔物によって道が崩されたり適当に繋ぎ直されたりしているところもあったが、聖剣の力で爆破して進めばそう問題にはならなかった。

だがそんな順調な行程に反して、ブラムは違和感を



拭えずにいた。

以前訪れた時と、罘の質が変わっていたのだ。以前は問答無用で殺しかかかってきていたのが、かなりマイルドになっている。

「……つーか、えらく偏ったラインナップだったよな」

洗面を浮かべつつ、これまでに見かけた罘を思い浮かべる。

ひとつ。床石に偽装されたスイッチを踏んだ盗掘屋が、床から急に伸びてきた触手に尻穴を突かれて悶絶していた。普通は槍か何か突き出てきて死ぬところだ。しかし出てきたのは、うねうねとした触手だった。

ふたつ。魔導師らしき女が壁に寄りかかった瞬間スライムが降ってきた。そうなると口と鼻を塞がれて窒息死するのが通例なのだが、そのスライムは女魔導師の服だけを綺麗に溶かして帰っていった。女魔導師は羞恥で半べそだったが、体には傷ひとつなかった。

みつつ。擬態獣ミミツクに引っかけた女戦士が下半身を飲み込まれていた。この場合予想されるのは血みどろの

死であり、擬態獣ミミツクの餌である。しかしそうはならなかった。女戦士は悲鳴ではなく嬌声をあげていた。まったく中でナニをしていたのやら。

そして拳句がこの尻である。かなりがちりとした拘束ではあるが、殺傷能力はないように見える。となるとやはり、罘としては殺意が薄い代わりに辱めの意味合いが強い。

「……どーも性的というか、卑猥だよな。こんな感じだった覚えはねえんだが……」

頭を掻き、ひとりごちる。それに——と、ブラムは続けて思い浮かべた。

配置されている魔物も随分偏っていた気がするな、と。

元々浅い階層だと弱い魔物が多かったが、いまは輪をかけて貧弱だ。スライムや触手生物など、近づくければなんの障害にもならない魔物ばかりが目につく。

「……魔王が死んだからか？」

魔王が存命の頃に学者が提唱した、魔王が持つ邪悪な瘴気が魔物を活性化させていたという説は、確かい

まのところ覆されていない。だとすれば魔王の死によって魔物が弱体化し、結果ダンジョン内の生息分布も変わったのだ——という推測も、あながち的外れではないのかもしれない。

(進みやすいのはありがたいが……追っ手を凌ぐ隠れ家としては、ちと頼りないな)

——と、そんなことを考えていると。

こつ……と。

遠くの方から音が聞こえた。しかも背後からだ。

(俺が……背後を取られた?)

少なからぬ驚きとともに、眉を寄せる。聞こえてくる音に集中した。

(靴音……だな。つてことは、魔物ではないってことだが……)

考えながら振り返る。すると——

「……ブラム・デイルモンド様ですわね?」

どこか億劫そうな声が、ブラムの耳朶を叩いた。

振り返った先にいたのは女だった。ぞつとするほど美しいが、ひどく青白い顔の女。ダンジョンにはまっ

たく似つかわしくない、メイドの格好をしている。しかも実用性の薄そうな、やけにひらひらした衣装だった。だがそれはあえて無視した。もっと気になる部分がある。

(あれは——)

女の美しい銀髪からはみ出ている耳。そこが気に入った。耳の先が尖っている。これは魔族の特徴で、つまり危険人物の証明でもある。顔が青白いのもそう考えると合点がいった。魔族はたいいてい、白を通り越して青い顔をしているものだ。

(……なんだって魔族がこんな浅い階層にいやがる。魔王が存命の頃ですら、地下二十階を越えなきゃ出てこなかったはずだぞ。しかも俺の名前を知ってやがるとは——)

やはりこのダンジョンは以前となにかが違う。ブラムは警戒心を最大限に引き上げた。

「ああ、確かに俺はブラムだが……君は何者だ?」

「何者、と問われましても。見ての通りとしか」

謎のメイド服魔族は、どこか面倒そうにそんなこと

を言った。見ての通り——ただのメイドだと。しかしそのわりには鬱陶しげな顔でフリルを摘んで、続ける。「一応名乗っておきましょうか。……イレーネというのが私の名前です」

「イレーネか。いい名だ。それで、そのイレーネさんがなんの用だ？ ダンジョンでメイド服を着てるような魔族に、名前を知られてる覚えはないんだがね」

そう言って肩をすくめると、イレーネと名乗った魔族はわずかに眉を寄せた。メイド服、というあたりでだ。あまり触れられたくないらしい。そんな意味なことだけがわかった。

彼女は気を取り直すように嘆息したあと、言ってきた。「主に言われて、あなたを迎えに来ました」

「迎えに？ それに……主だと？」

意味がわからずに聞き返す。ダンジョンの住人に知り合いを持った覚えはない。ここにいるのは敵だけだ。そして勇者が<sup>プラム</sup>負っていた役割とは、敵を皆殺しにすることである。つまり仮に知り合いがいたとしても、と

うの昔に斬り殺しているはずだった。

それに……主という言い回しが気になった。人間が言う分には一般的な言葉だが、魔族が口にするという意味が変わってくる。

（魔族の主……人はそれを魔王と呼ぶ。だがありえない。奴は確かに、この手で殺したはずだ——）

「あー、なにか考えていますね。でも無駄というか、正直私が面倒なのでやめてください。思考停止してついでくるのが吉です」

プラムが黙考に意識を取られていると、イレーネがすたすたと近寄ってきた。

「お手をどうぞ」

言葉と同時に手が伸びてくる。細く白い、綺麗な手だ。

「……この手はなんだ？」

「転移魔法で主のところにお連れします。それとも、残り二十階をご自身で踏破されますか？」

それならそれで構いませんけど——億劫そうな瞳は、そう言葉を続けていた。

ブラムはそれに嘆息しつつ、ふと先ほどの壁に——  
というか尻に視線を移した。

(……セクハラじみた尻に、半端な魔物の配置。加えて壁から生えてる謎の尻。極めつきに魔族が『お迎え』と来たか。……どんな取り合わせだろくでもねえ。これならまだ、魔王の野郎が実は生きてましたって方がいくらかマシだぜ)

その場合はすぐさま最奥まで走って、改めて魔王をぶち殺すだけでいい。余計な考え事をしなくて済む分、精神的には健康でいられるだろう。

だがどうやら、現実是非情であり……そしていくらか間抜けであるらしい。

壁で震えている——寒いかもしれない——裸の尻がそう言っている。まったくもってろくでもない。ブラムは握ったままの聖剣に視線を向けた。それから、また嘆息して鞘に収める。

(……ここどうだうだしてもしようがねえか。……あとケツの前で抜き身の刃物ってな、いくらなんでもイカれてる)

くだらないことを胸中で呟き、イレレーネに視線を戻した。

(この魔族を信用するかはまた別として。……主とやらには興味があるな。会って損はないだろう)

それに、どのみち最奥を目指してはいたのだ。二十階分業をさせてくれるというなら、乗ってみるのも悪くないのかもしれない。

「……………わけはわからんが。君の主とやらに会えば、説明してもらえるんだろうな？」

「さあ。それは主にお問合わせを。私は知りませんよ」

「そうかい。……くそ、なにがなんだか」

ブラムは毒づいたが、結局差し出された手を握った。ひんやりとした柔らかな手だ。イレレーネは軽く握り返してくると、小さく顎を引いた。

「では、転移します。……空間転移」

事務的な口調で言つて、彼女は魔法を起動し始めた。ブラムはその手順に目を見張った。

(転移魔法を……起動呪だけで?)

通常、魔法は詠唱という名の準備段階を必要とする。しかし彼女が呟いたのは起動呪と呼ばれる必要最低限の呪文だけだった。これは省略起動式と呼ばれる、人間の魔導師ではほんの一握りの実力者だけが扱える高等技術である。

(……おいおい。転移魔法といや大魔法の一種だろ。宮廷魔導師クラスでも、くそ長い詠唱をせにやならんはずだが……流石に魔族だな。とんでもねえ)

——と、ブラムは素直に驚愕していたのだが。

「……あれ？」

イレエネが首を傾げた。握ったブラムの手を持ち上げ、不思議そうに見つめる。

「……妙ですね。無詠唱で転移できない。私の唯一の特技なのに……」

彼女は不満そうな——あるいは不可解だという顔で呟いた。

(……ああ、そうか。俺を転移させようとしたから、予定より負荷がかかっているわけだ)

彼女が魔法に失敗した理由に心当たりがあった。こ

れは彼女のせいというより、一方的にブラムに原因がある。

「魔力の出力そのものを上げるか、面倒がらないで詠唱を入れてみな」

「はい？ ……あ、本当だ。少し踏み込んだら行けそうですね」

ブラムの助言に、イレエネは素直に従ったようだった。ふたりの体が淡い光に包まれ始める。転移魔法の起動段階だ。

「こほん。では、改めて行きましようか。——空間転移」

イレエネが再び起動呪を呟く。その瞬間視界が明滅し、景色が一瞬掻き消えた。

そして更に一瞬あとには、ふたりは巨大な扉の前に転移していた。



見上げるほど巨大なそれは、見覚えのあるものだった。ブラムは思い出す必要すらなく、その正体を口にする。

(王座の間……)

かつて、魔王が座して侵入者を迎えた場所。死を約束する魔の深淵。目の前にあるのは、そこに続いている扉だった。

「……っ……」

この扉を見るのは二度目だったが——それでも圧倒される重厚さを感じて、ブラムは喉を鳴らした。

「では参りましょう。主が待っています」

——と、イレエネが平然と告げてきた。ブラムの心情には——かつてこの中で魔王と死闘を繰り広げた勇者の胸中には、一切触れてこない。もつとも、問われなくても答えるのは難しいが。

なんにしる彼女はすたすと扉に近寄ると、手をかざして呟いた。

「開け」

どうやらそれが開門の合図だったようだ。城砦の門のごとき巨大な扉がそれに見合わぬ静かきで、少しずつ開いていく。扉が開ききると、イレエネは無言で中に入っていった。背中からついてこいという気配が滲

んでいる。逆らう意味もないので、ブラムはそれに続いた。

ただし聖剣の柄は握っていた。警戒はいくらしても毒にはならない。牙を剥いてくるのは不足した時だけだ。

(……相変わらず殺風景だな)

扉の向こうには、部屋と呼ぶには広すぎる空間があった。やや薄暗いが魔法と思しき青白い照明があるので、転ぶほどではない。

見たところ、間取りは以前とそれほど変わらないようだ。扉から王座まで真つ直ぐ赤い絨毯が敷かれていて、天井を支える太い柱が何本か見える。そして最奥には王座。

王座の傍には人影がひとつあった。この流れからすると、あれがイレエネの主なのだろう。彼女が無造作に歩いていくので、人影は急速に大きくなっていった。ほどなく完全にシルエットが確認できる距離になる。ローブを羽織っているらしいことは見て取れたが、フードで顔は見えなかった。

そこでブラムは気づいた。人影は思いのほか小柄だった。かつて見た魔王のシルエットとは重ならない。

「奴じゃないのか。……じゃあ、こいつはいつたい……」

やや緊張しながら心に呟いていると、先を歩いていたイレエネが声をあげた。

「マスター。ブラム様をお連れしましたが」

その言葉に、人影はぴくりと反応した。それから、どこか気楽な調子で答えてくる。

「あ、そう？ 早かったね」

人影は軽く手を上げた。それからブラムに向けて

「や、ブラム。しばらくぶりだね。元気してた？」

えらく気軽に声をかけてきた。ブラムはぴくりと眉を上げた。

「その声……」

聞き覚えのある声だった。しかも半年前までは毎日聞いていたほど、馴染みのある声。

（まさか……こいつ）

ブラムは心当たりを、声にして叫んだ。

「お前……アルか!？」

「正解」

ローブ姿の人影は楽しげに言ってフードを取った。

そうして晒された素顔は、半年前まで命を預けあつていた戦友——魔導師アルカノン・ロイゼ以外の何者でもなかった。

### 三章 再会と盟約

かつち、こつち……。

時計の振り子の上で、レリーフで描かれた二頭の獅子が互いを食い合っている。優雅な調度品に彩られた部屋の中で、そこだけが妙に殺伐としていた。ブラムはそれを見つめながら、まだ困惑を振り払えないでいた。

(なにが……どうなってんだ?)

眩き、改めて周囲を見渡す。

部屋には見たこともない植物が飾られていた。比喻でもなんでもなく黄金の花を咲かせている、奇妙な植物だ。茎が重さに耐えきれないのか、花はだらんと下を向いている。部屋に入った時、真っ先に気になったのがそれだった。メイドのイレエネに訊ねると、日光を必要としない魔界の花だと説明してくれた。

日光を必要としない——つまりは地下でも育つということだ。

そう、ここは地下だ。地上からは何百メートルも隔たっている、太陽に見放された空間なのだ。しかもかつて地上を地獄に変えた災厄の魔人——魔王が根城にしていた地下迷宮の最奥でもある。数多くの罠があり、凶悪な魔物が跋扈する魔の領域。

だというのに……。

「いやあ。何度も言うけど久しぶりだねえ。まさかまた地下迷宮で君と会うなんて、思いもしなかったよ」

上等そうなソファに腰掛け——これはブラムもだが——上機嫌にそう言ってくる、童顔の美青年の笑顔を見やる。その朗らかな笑顔から旧友に会えて嬉しいという以外の感情を読み取るのは、あるいは無粋なのかもしれないが——状況を考えるとそれも言っていられない。ブラムはすつと目を細め、探るように口を開いた。

「お互い様だろ、アル。俺だつてこんな地の底でお前に会うとは思わなかったさ」

童顔の美青年——アル。フルネームはアルカノン・ロイゼ。歳はブラムと同じだったはずだから、二十歳





ということになる。

ブラムのかつての仲間であり、ザヴァク帝国の若き宮廷魔導師でもある。本来ならこんな地の底にいるような人間ではない。だが彼は現実ここにいます。ダンジョンの最奥、王座の間から繋がっている一室に。しかもどうやらここが、彼の私室らしい。随分リラックスしているし、居住まいも自然だ。

「それにしても、君はなんだってこんなところに？ 救国の英雄として、歓待されているものとはかり思ってたけど」

アルは自身のことは柵の最上段に放り投げて、そんなことを聞いてきた。ブラムは眉を寄せて、ぼつりと呟く。

「……色々あってな。英雄でいられたのは、最初の一月だけだった。いまじゃ勅で命を狙われてる哀れな逃亡者さ。ここには、ひとまずの避難場所を求めて来たんだが」

「……おやおや。命を狙われているとは穏やかじゃないね。理由を聞いてもいいかい？」

アルは朗らかな笑みのまま訊ねてきた。ブラムは少し迷ってから、秘密にするほどではないかと思いい直して頷いた。

「一番の理由は聖剣だ」

ブラムは言って、剣帯から聖剣を外した。

「俺を勇者なんて窮屈なモノに押し込めた元凶。聖剣武器の分際で使い手を選ぶ我が假なこいつが、つまるところ全ての始まりだった」

憎々しげに聖剣を見つめ、ブラムは続けた。

「聖剣は元々キエト王家の持ち物だ。伝来の秘宝って奴だな。『王家に危機ある時、その輝きが暗雲を払う』なんて言い伝えが残ってるくらいだ。……難儀なことに、実際に危機は訪れたわけだが」

「十五年前の、魔王の降臨だね」

「ああ。湧いて出たような強大な敵に、王家は大いに慌てた。魔王の瘴気を取り込んだ魔物が各地で暴れ、治安が乱れては賊が跋扈した。負の連鎖の始まりだ。だがそれに対して、王家は有効な手を打てずにいた。元凶である魔王を討つのが正解だとわかってはいたが、

それが上手くいかなかった。魔王は宣戦布告したものの、このダンジョンに籠もりきりだったからな。何度か大規模な討伐隊が送り込まれはしたが、全て失敗に終わった。陰湿な罫と、狭い中でも自由に動ける魔物たちの前に膝を折り続けた。そいつはたぶん、帝国も似たようなもんだつたろ」

「だね。なにせその戦力を確保するために、何十年も続いていた王国と帝国の戦争を、一時的にしる休戦したくらいだから」

アルは皮肉な笑みを浮かべた。ブラムは笑わなかったが、胸中は似たようなものだった。

なにしろ、ブラムは話を続けた。

「そんな窮状が五年かそこら続いた頃。ついに聖剣が動き出した。宿主を選び……魔王を殺す暗殺者に仕立て上げた。ただひとり殺すためだけの、哀れな捨石だ。……その不幸な捨石が、俺だったわけだが。で、ダンジョン攻略には大規模な軍より少数精鋭を送り込むべきだという点で合意したキエトとザヴァクが、聖剣に選ばれた俺を中心に結成したのが」

「魔王討伐一行つてわけだね」

アルが先を引き取った。ブラムは小さく頷いた。

「そうだ。そしてなんやかんやあって、どうにか魔王をぶち殺したのが半年前。各地で魔物の動きが沈静化し、俺たちは一躍英雄となったわけだ。……だが、世の中そう甘くはないってことなのかね。王都に凱旋した俺は一月でその地位から転げ落ちた。……聖剣が我が俣を続けたせいだな」

ブラムは鼻を鳴らして、聖剣を鞘の上から小突いた。それから続ける。

「この馬鹿はな、魔王つて危機が去ったつてのに俺を宿主として認めたままなんだよ。つまり王家に返還できなくなつてやがったんだ。それに王家は——いや、王家というよりその周辺の大臣どもは怒り狂った。なんせ俺は王家とは縁もゆかりもない孤兒だったからな。それが王家伝来の聖剣を持ったままつてのは、いかにも政治的によくない」

「……で、『こやつは英雄気取りが度を越えている。いまに国を乗っ取る気ですぞ!』……つてわけ?」

「凄いなアル。ハゲに——ヒュケイル大臣閣下に一字一句同じことを言われたぜ。……ま、そういうことだよ。魔王がいらない以上、俺の存在は邪魔なものではないんだろうな。ぼつと出の下民が出しやばるなどばかりに、あつさり掌を返されちまったよ。国民感情を鑑みてか表向きは勇者のままにしているようだが……水面下じゃ殺し屋がわんさと送り込まれてきてる」

一気に入りきつて、嘆息した。対面のアルに視線を向ける。

「俺の事情はこんなところだ。で、俺と同じく本来は英雄であるはずのお前は、なんだってこんなところにいる？ 魔族のメイドなんて侍らせて」

ブラムはアルの背後——静かに控えているイレエネを一瞥した。彼女は最初から部屋にいたが、一言も発していない。必要がなければ話さないタイプなのかもしれない。

「ああ、僕の事情？ 別に大したことはないよ。大筋では君と同じかな。僕も帝国の人間から命を狙われて、ここに逃げ延びてきた逃亡者だ」

アルは言つて、肩をすくめた。

「お前が帝国に？」

肩を寄せて、声のトーンを落とした。同時にふと推測が脳裏を過ぎる。

アルは魔王を討つ旅が始まる前から宮廷魔導師だった。つまり超のつくエリートだったわけだ。しかもあまりにも若かった。その上で魔王討伐の功績が重なれば、称えられると同時にやつかみも買う。彼は嫉妬に足をすくわれ、国を追われたのだろう。

ブラムはそう推測し、同時に共感を覚えた。細かい経緯は違うだろうが、同じような境遇にある同志を見つけた気がしていた。

「そうか……お前も苦労したんだな」

しみじみ告げると、アルは苦笑して頷いた。

「いやまったく。彼らもあんなに怒らなくていいのに。たかが皇妃と皇女を、母子丼にした程度で——」

「待て」

アルの言葉を制止した。いまなにか聞き捨てならぬことが含まれていなかったらうか。

「……皇妃と皇女がなんだったって？」

「え？ だから母子丼おやかごどん。凱旋したあとに祝勝パーティーがあつてさ。そこで口説いたんだ。皇妃の寢所に招かれてね。三人で一晩中愉しんだよ」

彼はあつけらかんと告げた。背後でイレエネがゴミを見るような目をしたが、ブラムはそれに内心同意していた。そんなブラムの胸中を無視して、アルの気楽な声は続いた。

「でも、それがバレちゃつてね。帝とその周囲はもうカンカン。思いつきり指名手配されて、取るものも取りあえず尻尾を巻いて逃げてきたつてわけ」

「お前……」

ブラムは頭を抱えた。そういえばこいつはそういう奴だったと。見た目は実に好青年だが、皮一枚下には好色な肉食獣の貌かおが潜んでいる。

（前言撤回——こいつは同志じゃない。ただのアホだ）

こめかみに鈍痛を感じて、ブラムは天井を仰いだ。無機質なダンジョンの天井。無論、そんなところに慰

めの言葉が書いてあるはずもなく。

「そんなことはいいいじゃない。どうせ終わった話だ。大事なのはこれからどうするかつてことさ」

アルは気楽に笑つて見せた。国を挙げて命を狙われているとは思えない、実にいい笑顔だった。

「……そうだな」

言いたいことは色々あつたが、ひとまずそれは飲み下して、ブラムは頷いた。ここでアルの行状まがづらを論つても仕方ない。

「そういやこのダンジョンの様子がおかしくないか？ 俺が見たのは地下五階までだが、それでも以前とはだいぶ違ったぜ」

気になつていたことを訊ねると、アルは頷いた。

「そうだね。僕がここに来たのは三ヶ月くらい前なんだけど、その時は様子が変どころか、ダンジョンとしては死んでいたよ。魔王がいなくなつたことで機能が停止しているところが多すぎた。僕がそれを修繕したんだよ。様子が違ってたのはそのせいだと思う。修繕ついでに僕好みに改造したからね」

「……じゃあ、地下五階の壁に尻が生えてたあれは……」

…」

「うん。僕が考えた罠。面白かったでしょ？ 壁に穴を開けて、奥に大粒の魔鉱石を仕掛けておいたんだ。釣られた獲物が手をかけると、穴が縮まって抜けなくなる仕組みってわけ。あと、あのあたりにはゴブリンが巢を作ってるから、放っておけば武器から下着まで勝手に追剥ぎしてくれるよ」

「…ああ、裸だったのはそのせいか」

呻いて、嘆息した。アルは楽しげに笑っているが。

「はは、それはともかく。ブラムはこれからどうするんだい？」

「さてな。とにかく身を隠さねえと、と思つてここに来たんだ。正直先のことなんざ考えちゃいねえよ。それが許される状況でもなかったしな」

ブラムは捨て鉢な気分で肩をすくめた。アルはそれに、ふむと呻く。

「当てはないってわけだ。ならちようどいいかな」

アルは立ち上がった。それから芝居がかった動きで手を広げ、告げてくる。

「僕はどこを——このダンジョンを僕の楽園にするつもりでいる。帝国だろうと王国だろうと手出しできない、無敵の迷宮にね」

「ああ、そいつは素敵だな」

ブラムは楽しげなアルの調子に苦笑しつつ、相槌を打った。アルは頷くと、少しだけ声のトーンを落とし、た。

「でも、それには足りないものがいくつもある。罠の再設置はまだまだ必要だし、魔物もだいたいぶ数が減っている。挙げていくとキリがないほど、色んなものが足りていない。……そしてなにより問題なのは」

「問題なのは？」

アルが言葉を切つたので、ブラムは問うた。するとアルはなにかを考えるように虚空を見つめた。だがやがて纏まつたのか、真剣な表情で言つてきた。

「……これに関しては、実物を見せた方がわかりやすいと思う。ブラム、ちよつとついてきてくれるかい？」

彼はそう言うのと、ブラムの返事を聞かずに歩き出した。ブラムはそれに眉を寄せ、なんとなくイレーネの

方に視線を向ける。

「行つてください。いいものが見れますよ」

彼女は表情を動かさず、それだけを言った。特に説明はないらしい。

「……ま、ここまで来たら最後まで付き合うさ」

ブラムは少し悩んだものの——結局そう呟いて、アルのあとを追った。



アルが向かったのは先ほどまでいた王座の間だった。それも最奥にある王座の裏に連れて行かれる。

「アル。こんなところでなにを見せてくれるっていうんだ？」

「もう少し待つてよ。すぐだから」

アルは言うのと、口の中で何事か呪文のようなものを呟いた。その瞬間。

「ごごと地鳴りのような音が響き、重量感のある王座が少しずつ横にずれた。するとそこに、更に地下へと続いている階段が現れる。」

「……秘密の入り口つてわけか」

「そんなところさ。さ、見せたいものはこの先だよ。」

——ライオン鬼火」

アルは魔法で鬼火を生むと、足元を照らしながら階段を下りていく。ブラムは肩をすくめてそれに続いた。階段はそれほど長いものではなかった。道としても一本道でしかなく、迷うようなものではない。

「ここだよ」

階段を降りきったところで、アルがそう言うて前を示した。彼の示す先にはいくらか奥まった空間が広がっている。そこはアルの鬼火が必要ないほど明るかった。しかし、なぜだか心がざわめく明るさでもあった。光が無機質な青白いものだからだろうか。

「……違うな。似てるんだ。聖剣の放つ光と——」

呟いていると、アルがゆっくりと歩き出した。彼は光の根元へと向かっていた。空間の奥にあるなにかの装置。それがこの光の源だった。

「こいつはなんだ、アル。まさかただの洒落た灯りだ、なんて言わないよな？」

「は、もちろんさ。これは魔力炉——ダンジョンコ

アだよ。この場所より更に下にある、大陸の霊脈……その合流地点。——霊穴。その大陸最大の圧倒的な魔力を、この装置がくみ上げて貯蔵してるんだ。原理的には魔鉱石ができ上がるのと同じものだよ。これは意図的に魔力を吸い上げているから、規模は比べるべくもないけれど。なんにしるこのダンジョンのトラップなんかは、全てこの装置から魔力を引いて作動している。つまり……ダンジョンの心臓さ」

「心臓。こいつが……」

眩き、ブラムはその装置を改めて見やった。装置は床から伸びた筒状の台と、それに設置された透明な容器のようなもので構成されていた。容器は巨大な球状であり、中には液体が満ちている。光を放っているのは、よく見るとその液体そのものだった。

「つてことは、あれは魔力か。それも物質化するほどの濃度の……」

ブラムは眉を寄せた。魔力は通常、単独では物質界に存在していない。なにかしらの物質に溶け込んでしか存在できないからだ。だが極めて高い濃度になった

時だけは別だと、他でもないアルの口から聞かされたことがあった。もつとも、自然発生するものでは決してないが。

「その通り。あれは超圧縮された魔力だよ。ただし、あのままでは役に立たないけれど」

「そうなのか？」

「うん。保存には適した状態なんだけど、どうにも純度が高すぎてね。そしてこれこそが、僕が君に見せたかったものであり……このダンジョンの弱点なんだ」

アルは困り顔でそんなことを言った。ブラムは黙って頷いた。アルは続きを言おうとしていた。

「かつて魔王はこの無尽蔵に近い魔力を背景に、地上を制圧することを目論んでいた。つまり彼は、この液化した魔力を扱えたんだ。具体的には……彼は特殊な魔法でこの魔力を加工して、ダンジョンに行き渡らせていた。同時に自分自身にもその魔力を運用して無敵を誇っていたようだね。余談だけど……魔王がこのダンジョンから出てこなかったのは、無敵でいられるこの場所から離れたくなかったからだ、僕は見てい



る」

「初耳だな。暗殺を命じられた俺にも、そんな情報は伝わってなかったぞ」

「だろうね。僕だってこれを知ったのはごく最近さ。よく勝てたよね、僕ら」

アルは苦笑した。それから、また続けてくる。

「ともかく……この魔力はこのままだとダンジョンに行き渡らない。もう一段階、加工してやる必要がある。そして魔王が作ったそのための術式が、幸運なことに残っていた」

「残っていたって……どこにだ？」

「物として残っていたわけじゃないよ。それは大事なところじゃない。大事なのは僕が魔王の術式を身につけたってことさ」

アルは肩をすくめて言った。簡単に言っているが、内容は明らかに常軌を逸している。

「……魔王が使った魔法を、お前も使えるってことかよ。その時点で人間離れた技術のような気もするが……まあいい。その様子だと、なにか問題があるん

だな？」

「うん。形ができたのはいいんだけど、流石に魔王謹製の制御魔法だ。人間が扱うにはちよつと面倒なところがあつてね。詳細は省くけど……起動するのに、ある特殊なものが必要になるんだ」

「アル。もったいぶらずに教えてくれ。こっちは魔法に関しちゃ門外漢だ」

ブラムは大仰に肩をすくめて見せた。アルは苦笑しつつ、頷いてくる。

「はは、ごめんごめん。術式に必要なのは強い負の魔力——生物の負の感情だよ」

「負の……感情？」

「そう。不快とか怖いとか、そういう心の動き。それが負の感情さ。そんなものが必要なあたり、実に魔王らしい術式だよな」

アルは言葉で切った。皮肉げに笑って続ける。

「感情とは力だ。特に魔道においてはね。魔王はそれをよく知っていて、この術式を編んだ。そしてこのダンジョンを造ったのさ。魔鉱石という餌をばら撒き、

人間を呼び寄せ……張り巡らせた罫と従えた魔物で搦め捕る。そして恐怖と絶望を与えて負の感情を生み出させ、それを使ってコアから新たな魔力を得る。更にその得た魔力に自らの瘴気を混ぜて、霊脈に流してやれば……大陸中の魔物に彼の力が行き渡る。なにもしなくても、大陸中の混乱は深まり続けるわけだ。そうなければ賊や食いつぶされた連中が増えて、またダンジョンに潜って魔鉱石を求める。……はは。よくできた循環構造だよ。人間の欲つてものをきちんと理解して

「……なるほど」

ブラムはアルと同じ笑みを浮かべた。皮肉な笑み。人間の欲望が魔王に力を与え続けていた。だから長年てこずつた。笑うしかない自業自得の構図だった。

アルはこちらをじつと見つめながら、更に続けた。「聖剣きみという例外がなければ、きつと人類は未来永劫戦い続けることになっただろうね。そのくらい、このダンジョンはよくできています。そしてその事実は僕にとつては福音だ。なにせ人間は、魔王が死んだところ

で変わりやしない。魔鉱石という金のなる木があるうちは、必ず欲望に駆られてダンジョンに踏み込んでくる。つまり僕も魔王の造ったシステムのご相伴あずかに与れるつてわけ。上手く回るようになれば……ここは真実、僕の楽園となる」

アルは一步、こちらに近づいてきた。そしてブラムの胸を指差し、にやりと告げる。

「——そして。聖剣を持つ君が、もしも僕の同志となるなら。魔王が失敗した唯一の原因を、腹の中に収められるのなら。これはもう本当に無敵の楽園だ。それはとても、素敵なことだと思わない？」

アルはそこで言葉を切り、ゆつくりと手を差し出してきた。一緒に楽園を目指そう——そう誘われていた。「……………」

ブラムは差し出された手を、しばらく見つめた。躊躇があつたからだ。この手を取る以外に、もはや生きていく術などないとわかつていた。ひとりで大陸中を逃げ回るのは限界がある。わかつていたからここに来た。

それでも躊躇した。これは別離だ。そう思ったからだ。

アルという一蓮托生の同志を得る代わりに、他の全てを——これまでの人生を無に帰す。憧れていた真つ当な人生への可能性を、完全に潰す行為。それがわかったから躊躇した。……だが。

「……どのみち、大した人生でもなかったかな」

苦笑混じりに呟いた。戦災孤児だったブラムは、親の顔もろくに覚えていなかった。物心ついていくらか世界の仕組みを知った頃には、聖剣に選ばれてしまった。そのあとに待っていたのは、勇者という名の血塗られた宿命だ。ひたすらに翻弄され、ただただ目の前の敵を殺し続けてきた。

得たものなどなかった。ありもしない持ち物を失うという、矛盾した気分だけを味わってきた。

ならば。ここから新たに人生を始めるといっても、悪くないのかもしれない。

それに——アルはダンジョンコアという、自らの生命線を晒してまでブラムの協力を求めている。そ

れに応えるというのも、また一興ではないか。

「……いいさ。捨ててやる」

呟いて、ブラムはアルの手を握った。アルの整った顔が邪悪に歪む。

「……契約成立。これで僕らは改めて同志——相棒だ。あの時の一行は間違ひなく最強だったけど、僕と君が相棒パティつてのも中々どうして悪くない。そう思わない？」

「そうだな。はぐれ者同士——実にお似合いだろうぜ。手を組んだ場所が地の底つてのも、実に俺たちらしい」  
ブラムもまた邪悪に笑った。元勇者とは思えない——それこそ魔王のような笑みだった。

## 四章 信を用いて契りと成す

アルと手を組むことを決めたその夜。

ブラムは与えられた客室、その寢台にいた。

(……色々あったが。ひとまず腰を落ち着ける場所はできたか……)

ぐったりと呟きつつ、室内を見回す。

室内は広く、普通に使えば三人は寢泊まりできそうな造りになっていた。先ほど招かれていたアルの私室と違い、調度品の類はあまりない。床には灰色の絨毯が敷かれていて、天井には魔法で灯る照明がいくつかあった。

地下なので窓はないが魔法で換気されているらしく、温度や湿度も快適に保たれている。他には大きな寢台がひとつと、書き物ができそうなテーブルとイスのセットがひとつある。置いてあるのはそんなものだが、寢泊まりするには不自由ない。

(上等な部屋だよな。あの小屋は隙間風がひどかった

し)

ひとしきり室内を観察して、寢台に体を預けた。それから、ぼんやりと黙考する。

これからのこと——ブラムがこのダンジョンの中で帯びる役割などのことは、明日以降に詰める予定になっていた。ブラムは今日五階までとはいえダンジョンを攻略して疲れていたからだ。

……いやそもそも、この半年間常に暗殺者を警戒していたブラムだ。その疲労は彼自身が把握しているよりも重かった。

(……言ってる傍から臉が重くなってきた。きやがった。——っ)

眠気に瞬殺されそうになって、体を起こした。同時に聖剣に手を伸ばす。

(……落ち着けよ。ここに敵はいない)

確認するようにして呟く。無意識の行動だった。別に眠ってしまったもよかつたはずだが、周囲に敵がないか確認してから眠るといふこれまでの癖を体が覚えていたのだ。

(……いつ寝首をかかれてもおかしくはなかったからな。こりや、なにも気にせずぐっすり眠れるのはまだまだ先かね)

ブラムが苦笑した、その時だった。扉がノックされ、声が飛び込んできた。

「——夜分に失礼します。イレーネです」

「? ああ、鍵なら開いてる。入ってくれ」

訝しい心地ではあったが、ひとまずそう答えた。すると扉が静かに開き、名乗った通りイレーネが部屋に入ってくる。

そこで気づいた。彼女の格好が先ほどとは違っている。いま彼女が着ているのは先ほどのメイド服ではなく、極薄の生地で作られたネグリジエだけだった。

燃えるような赤色のそれは、彼女の白い肌にはよく映えていた。率直に言つて似合つてはいる。だが、問題はそこではない。

「どうした? こんな時間にそんな格好で」

そう問いかける間にも、扇情的な格好の彼女はゆっくりとこちらに歩み寄つてきた。彼女はブラムの目の

前にまで来ると、相変わらず淡々とした調子で告げてくる。

「マスターに命じられて来ました。疲れてるだろうから、『いい夢』を見させてあげるようにと」

「……あの野郎」

こめかみを押さえて呻いた。こんな格好の女が見せてくれる『いい夢』——意味することはひとつしかない。

「余計なお世話だクソツタレ」と伝えておいてくれ」嘆息混じりに告げると、イレーネは眉を寄せた。

「意外ですね」

「なにがだ?」

「男はみんな、下半身で生きているものかと。少なくともこれまではそうでしたので」

イレーネは淡々と言つた。内容のわりに不快感や嫌悪感はないような口調だ。男の性欲については妙な納得と割りきりがあるらしい。ブラムはそれを見やりながら、肩をすくめた。

「俺も基本的にはそうさ。本能に抗うつもりはそれほ

どない。ただ……これまであまり、女にいい思い出がなくてな。枕の下にナイフを隠してようなのばっかりだった」

ブラムを狙って放たれた殺し屋の中には、女——それも戦いからは縁遠そうな者を装って近寄ってくるケースが多数含まれていた。そして実を言えば、一番肝が冷えたケースもその手合いだった。

「何度が殺されかけてるんでな。いくら鍛えようが、必死こいて腰振ったあとじゃ男はいまいちなさ。それに……抱いた女を返り討ちにするってな、中々堪える」

そういう部分も含めて、直接殺しにかかってくれる方が気が楽だった。暴力はブラムが持ちうる唯一最大の武器だ。

「男ってな君が言うように単純なものでな。下半身で話をしちまうと簡単に情が移る。そうすると、どんな屈強な戦士でも簡単に頸と胸が泣き別れるハメになる。君に魅力を感じないわけじゃないが……性分だね。理解してもらいたい」

「……そうですか」

イレレーネは納得したのかひとつ頷いた。だがその後。  
後。

「でも、それでは困ります。既にマスターから命令を受け取っていますので」

そう言って、一歩近づいてきた。頑固なことだ。ブラムは目を細めた。

「なら、こういうのはどうだ。シートなりなんなりで君を縛って行為に及ぶ。女としてというより道具の扱いだな。これで寝首を搔かれる心配はなくなる。もちろん……魔法の気配を感じれば即座に殺す」

提案というより脅しのつもりだった。これだけ吹っ掛ければいかに肝が据わっていようが躊躇うだろう。また、彼女のアルへの言い訳にもなる。これなら手ぶらで帰っても問題ないはずだ。

だが。  
「ええ、それでも構いませんよ。よろしければ手錠などお持ちしますか？」

彼女は真顔でそんなことを言った。ブラムは洪面を

浮かべて応じた。

「……解せねえな。君はダンジョンの中で俺の背後を取った。つまりその程度には力のある魔族だってことだ。それがこんな馬鹿げた提案に即断で頷くってな、ちよいと納得しかねるね。たとえ主人<sup>アル</sup>の厳命があつたという前提でもだ」

言葉を切った。イレエネの反応をうかがう。だが彼女はまったく表情を動かさず、ただこちらを見つめていた。ブラムは何度目かの嘆息を漏らして、言葉を続けた。

「……そもそも。さつきはアルに気を取られて忘れていたが、君の存在は中々に謎だな。……君はいったい何者だ？」

「何者、というほどの存在でもありません。強いて言うならあなたが殺した魔王の元部下ですよ」

「なに？」

ブラムは眉を寄せ、とっさに警戒心を浮上させた。だが具体的な行動になる前に、イレエネが億劫そうに制止してくる。

「ああ、面倒なので早とちりはやめてください。別に元上司の敵討ちなど考えていませんよ。そもそも私は魔王が嫌いでしたし」

さらりととんでもないことを言うイレエネに、ブラムはいっそう眉間の皺を深くした。魔王が嫌いな元部下。それがいまは、なぜかアルの下にいる。繋がりがいまいちわからない。

「……悪いが、俺はあまり頭がよくなくてな。馬鹿にもわかるように説明してくれよ」

「……えー。面倒な……」

イレエネはついに口にまで出して面倒がった。だが、根気よく見つけていると――

「……わかりました。一度しか言いませんよ」

諦めたように嘆息して語り始めた。

「まずは認識の訂正をしましょう。先ほどあなたは『力がある魔族』と私を評しましたが、それは間違いです。私は魔界どころか人間界の力関係に照らし合わせても、弱小と言われる程度の魔族ですよ。あなたの背後を取ったのは、単に転移魔法が得意だからということですよ」

「……………」

転移魔法なんて高等技術が得意な時点で、それなりなんじゃないのか——思いはしたが口にはしなかった。仕草で先を促すと、彼女は頷いて続けた。

「そんな弱小の私です。基本的に長いものには巻かれろで生きてきました。魔界でケイロンゼヴィウス——あ、これは前魔王の本名です——にとっ捕まって奴隷になった時も、仕方ないかなと思いつながら働いてました。魔王が地上を征服しに向かう際、とりあえずで連れて来られた時も同様でした。雑魚が菌向かってどうにかなる相手ではありませんし」

思いのほかへヴィな身の上話に、ブラムはやや身を引いた。だが当のイレエネが平気な顔をしているので、口は挟まないでおく。

「そんなわけですので、魔王があなたに殺された時は正直言って拍手したくらいです。無論ものついでで殺されてはたまりませんので、ダンジョンの片隅に避難してですが」

「人気なかつたんだな魔王……」

なんとなく不憫な気分になって、ブラムは呟いた。人間に恨まれているのは当たり前としても、身内にまで死を祝われているとは。

「しかし……浮かれ気分も長くは続きませんでした」  
イレエネがやや声のトーンを落とした。元々平坦な声音なのでわかりづらいが。

「魔王の支配から解かれた私ですが、ある時ふと気づきます。……『あれ？ 魔王の馬鹿魔力なしでは魔界に帰れくない？ やばくね？』」

「急にキャラ変えんな。戸惑うから」  
たまらず突っ込んだがきっぱりと無視された。淡々と続けてくる。

「しかも魔王の圧倒的な魔力制御によって成り立っていたダンジョンですので、彼がいなくなると急激にしょぼくなりました。畏は半数が停止。魔物も寄らば大樹の陰で寄って来ていたものが多かったので、あっさりと野に散っていききました。そして盗掘屋が我が物顔で入り込んでくるようになったわけです。……非常にまずい事態です。私の戦闘力では、正直言って彼らに



すら勝てません。私は唯一堅牢さを維持していた最奥に……王座の間に引きこまりました」

「……人生、カウントダウンで駆け落ちてるな」

「余計なお世話です。……まあなんにしろ。しばらくはそれでどうにかなったのですが、やがて最奥すら暴かれる時が来ました。それがいまのマスター——アルカノン・ロイゼによるダンジョン制覇でした。当然のことながら、私にとっては致命の状況です。盗掘屋にすら勝てない私が、元勇者一行の魔導師になんて勝てませんし」

「……だが、アルのことだ。君を殺そうとはしなかっただろう」

それはいま彼女が生きていることから明白だった。

イレエネは小さく頷いた。

「ええ。開口一番が『君可愛いね』でしたから」

「奴らしいよ。それで、アルと君のなんらかの利害が一致していまに至る——そんなところか？」

話が現在に繋がったところで、先を引き取った。イレエネは喋り疲れたのか嘆息してから、小さく頷く。

「はい。先ほどご覧になった魔力炉……ダンジョンコア。あれに貯蔵された魔力の加工術式を、私は知っていましたから。教える代わりに、ダンジョンを安全な住処にしてくれと頼んだわけですよ。あとはメイドとして雑事をしたりもあります。大雑把に言えばそれが私とマスターの関係……つまり利害の形です」

彼女は言葉を切って目を瞑った。それがなにを意味するのかわからなかったが、どのみち考える前に彼女は目を開けた。

「そしてマスターは旧知の知人の訪問を労うために——あるいは再会の贈り物として。私に夜伽よこを命じたわけです。あなたとマスターの利害をより明確にするために」

イレエネはネグリジェの裾を摘んだ。白い太腿がちらりと挨拶してくる。プラムがそれにふと気を取られると、彼女は寝台に座ってきた。誘うようにプラムの腕を取り、胸を押しつけてくる。

「——納得して頂けました？」

「ああ、十全に。実に奴らしい慎重さだよ」

ブラムは苦笑して、ゆつくりと立ち上がった。ぼんやりと見上げてくるイレーネを見つめて告げる。

「……さっきも言ったが……男つてのは単純だ。下半身に思考を明け渡すと、実に簡単な生き物になる。特に君みたいな美人は効果が高い。奴はそれを十分以上に知ってるだろう」

「……………」

イレーネは無言でこちらを見上げてきた。答え合わせをしている。なぜかそんな気分になった。

「君は単なる贈り物なんかじゃないな。俺という暴力装置を制御するための鎖……保険つてところだろう。」

三年背中を預けあつた信頼だけでは、奴は満足できなかったわけさ。なにしろ自分の急所——ダンジョンコアを見せちまつたわけだからな。だから明確な根拠……

信用に値するなにかを欲しがった。それが君だ」

「信頼と信用は、どう違うんですか？」

イレーネは内容とは異なる部分を指摘した。どこか面白がるように。笑みとまではないかないが、少し頬が緩んだ気もする。ブラムもまた笑った。少し皮肉げで

はあつたが。

「信頼には根拠がない。『信』を『頼る』わけだからな。だから裏切られると怒る。対して信用には根拠がある。根拠に基づいて『信』を『用いる』。だから裏切られても構わない。というより、その違いを理解しているなら、そうさせない立ち回りをする。だから裏切りは、厳密には裏切りではなくなる。予定調和さ。なにかミスがあつたから、当然の結果として離れていくだけだ」

言うど、イレーネは今度こそ笑った。気に入つたという笑み。

「その論理。ここに来る前にマスターが同じことを言っていました。やはりあなたとマスターは仲間ですよ。そして……この私も」

彼女は立ち上がった。それから一歩近づいてきて、ブラムの首に手を回した。拒まずに目を見つめていて、ゆつくり引き寄せられた。

口づけてくる。唇が触れるだけの口づけ。ダンジョンで握つた手は冷たかつたが、唇は熱かつた。数秒もしないうちに、唇は離れていった。彼女はく

すくすと笑った。

「あなたの信用を買いたいのは……保険が欲しいのは。マスターだけではありません。私もそうです。そして私はあなたの暴力に、その価値があると踏んでいいる。勇者ブラムの圧倒的な暴力を欲している。だから私は、私が唯一持つ財産を——この体を売ろうというわけですよ。今日ここに来たのはマスターの命も含んでいますが……遅かれ早かれ来ることになったでしょうね」

「なるほど。それが君の武器か」

息遣いが聞こえるほどの距離で、ブラムは告げた。イレーネは頷く。

「ええ。誰かに擦り寄って生を強請る。卑怯だと思えます？」

小首を傾げるその仕草は、それこそ卑怯なほどの愛嬌があつた。普段無表情に徹しているのは、このギャップを狙っているからか。ふとそんなことを思い浮かべ、ブラムは苦笑した。それから首を横に振る。

「いいや。誰でもなにかに縋って生きてるもんだよ。農夫は畑、兵士は剣、国王ですら血筋って無形の財産

に縋ってる。それで言えば……俺は暴力、アルは魔法に縋ってしか生きていけない。それしか知らんからな……君にとつては『女である』ということがそうなんだろう？ なら、それもひとつの生き方だ」

言い終えた瞬間に、今度はこちらから口づける。当たり前のように受け入れられた。しばらくして唇を離れた。そのままイレーネの顎を掴んで上を向かせる。がっちり視線が絡んだ。それを意識しながら告げる。「前言撤回だ。まずは一晩君を買おう。見事俺を搦め捕れば……アルとの共闘とは別のところで、俺と君の共存が成立する。聖剣の担い手が君の守護者となるわけだ。自分で言うのもなんだが、たぶん現状最強の護衛だろうぜ」

「最強という響き……とても素敵ですね。私自身には縁がないから、余計にそう思えます」

彼女は笑った。小さな笑みだが——元が無表情だけに随分明るく見える。

打算的ではあるが、それだけに信用できる笑みだ。長らく見ていなかった、安心できる表情だった。

(……打算を見て取ってから安心するか。我ながら歪んでるな)

そんなことを皮肉な気持ちで吹きながら。

ブラムはゆつくりと、イレエネを脱がしにかかった。



ブラムは部屋の真ん中で、裸体にしたイレエネを改めて見つめていた。

赤い下着が取り除かれた彼女は、率直に言つて美しい。全体としては細身のシルエツトだが、乳房は程よく実っている。腰周りには肉がなくすつきりとしているが、骨格が元々そういう形なのか印象としては肉感的に映つていた。股間には髪と同じ銀髪の恥毛がひっそりと茂り、秘した女の最奥を感じさせる。

そしてなにより、肌が美しかった。どこに視線を向けてもシミひとつなく、透き通るように白い。

それは彼女自身が持つ美点であり——同時に魔族であることを改めて示してもいた。

魔界。太陽のない不毛の大地と聞いている。であればシミなどできようはずもない。くだらないことを思

い浮かべ、苦笑する。

彼自身も既に裸体だった。殺戮者として鍛え抜かれた体を、イレエネもまた見つめてくる。

「……刃みたくない体ですね。それも、使い込まれた抜き身の白刃……」

彼女はこちらの胸板に触れてきた。そのまま体中に残っている傷痕に指先を這わせる。息遣いも聞こえるような距離に、美しく整った顔があった。その顔はこれから行われることに対しての期待か、わずかに朱が差しているように見えた。元が色白だけに、そうした変化は隠しようもなく現れてくる。それを見て昂るのを自覚しながら、ブラムは咬いた。

「実際そうさ。この体を刃にして、俺は魔王を殺した。それだけじゃない。色々……殺してきた」

「女も……ですか？」

からかうように言われる。ブラムは肩をすくめた。「どうか。俺はそのつもりだったが、死んだ振りだったかもしれない。女の嘘は手が込んでる」

イレエネがわずかに口角を上げた。二度目の微笑。

「謙虚ですね。でも、こっちはあなたと違って自信満々のようですけど?」

彼女は言つて、胸板から手を引いた。そのままついと下げて、下腹部——目の前の雌の匂いに反応している男根に触れてくる。

「こっちは……刃というより槍でしょうか。これで私を殺すんでしよう?」

くすりと笑つたイレーネは、既に臨戦態勢にあるブラムの肉槍を指先で撫でた。白く細い指。繊細な触れ方に、ブラムの分身はびくりと反応した。

ブラムは指先の愛撫を堪能しながら、ゆっくりと乳房に触れた。掌からわずかに零れる程度の程よい大きさ。持て余すことも物足りなくなることもない。力を込めるまでもなく指が沈み込む感触は、甘美であり淫猥だった。

「んっ」

乳房を弄られると、彼女は少しだけ息を詰めた。くすぐったがるような表情になる。肌が敏感な性質なのかもしれない。

髑のように愛撫を続けた。反応のいい女は、ただ交わるのでは勿体無い。

「っ……う……」

声を堪えたような吐息が、小さな口から零れた。切なげに眉が寄つてくる。媚態だった。

ふとイレーネの目がなにかを言つた気がした。察して愛撫はやめないまま口づける。今度は最初から舌を絡めにいった。

彼女はそれを受け入れると、ブラムの男根を両手でしっかりと握つた。上下に擦つてくる。こちらの愛撫に対抗するような調子だった。

応じた。抱き寄せて、空いている手で背中を撫でる。乳房への愛撫を少しだけ強めた。指先を乳首に当て、押し込んでから弾くように動かす。すると柔らかい乳房の感触に、わずかに硬いものが混じり始める。

「……ん」

彼女の息が乱れた。気分が出てきている。判断して一度唇を離した。

手を引いて寝台に座らせる。それから愛撫を続けた。

首筋を甘噛みしながら、乳房へと降りる。硬くなり始めた乳首に口を寄せた。

「あ……」

甘い呻きとともに愛撫の手が止まる。自分の快樂に意識が向いたのかもしれない。

口の中で硬さを増していく小さな果実には、まだ触れなかった。控えめな乳輪に舌先を這わせ、円を描くように廻る。撫でている背中が震えた。時折吸いついてやると、リズムが狂って肩が震えたりもした。本当に反応がいい。溺れ甲斐のある体だ。

勃起してきた乳首を舌先で舐め上げた。イレーネが仰け反る。勃起した乳首はより敏感になる。くすぐつたいという範囲を超えて、官能が生じ始めたのかもしれない。

（もう少し強くてもいけるか？）

乳首を甘噛みした。前歯で捉えたまま舌先で弾く。イレーネがブラムの頭を抱えるように押さえた。どうやらお気に召したようだ。

しばらくそうして愛撫を続けた。そしてイレーネの

気分が高まっているのを感じると、反対の乳房にも同じ愛撫を加えていく。そうすると、刺激の強さは一度リセットされる。体に積もった淫気とは裏腹に、最初の刺激はあまりにも弱い。彼女にはもどかしい時間だろう。それはわかつていた。わかつていたが、あえてやっていた。

「つ……案外、丁寧ですね……」

焦れているのは声の調子でわかった。だが無視して、ブラムは時間をかけてイレーネの乳房を廻り尽くした。そうして両方の乳首が衰えなほど勃起し、彼女の首筋が淫欲で赤くなつた頃になってようやく口を離れた。

顔を見つめた。淫情で目尻が下がり、額にはかすかに汗が浮いていた。唇が少し開き、甘い吐息を漏らしながらもいる。率直に言つて媚態だった。悪く言うなら、雌の表情に近づいているとも言えるか。

「いい顔だ。滾こぼつてくるよ」

「……ヘンタイ」

一方的に自分だけが昂っている——そういう状況は彼女とて恥ずかしいのか、悔しげに罵倒の言葉を吐い

た。ブラムはそれに苦笑しながら、今度は手を動かし始める。左手は背中 of 愛撫に使っているので、右手だ。イレーネの内腿に伸ばした。

股間には触れずにゆつくりと撫でる。徐々に中心に近づくと見せかけて、ある程度のところでは反対の腿に手を移す。それを繰り返していく。じれつたい刺激。

「う……ん……」

焦らされる感覚に、イレーネの声が一段甘くなる。

「まだ焦らすのですか？　もう準備なんてできているのに」

切なげに言つて、彼女はブラムの手を取つた。股間に導かれる。湿つたという程度では済まされない水気が、指先に触れた。確かにそろそろ挿入に耐え得る濡れ具合のようだ。

だが――

「好物は最後に食べるタイプだね。悪いがもう少し愉しませてもらう」

告げて、またイレーネの唇を奪つた。舌を絡める。そうしながら、秘所に触れている指をゆつくりと動か

した。膣内には入れず、秘肉をこねるように甦る。わずかにぬめり気を帯びた愛液が、くちゆくちゆと卑猥な音を立てた。

「ふあ……んっ」

イレーネの腰が逃げるように引かれる。半端な刺激はもういらぬのかもしれない。しかしそれがかえつて媚態に思えて、ブラムは逃げる腰を指で追つた。

白き女魔族の股間で、指をもそもそと蠢かせる。決定的な刺激は避けて、甦るように。

「……っ。もう、それは……」

しばらくすると肩に噛みつかれた。痛むほどの力ではなかつたが、無言の抗議は感じ取れる。そういう仕草だった。あるいは声を我慢するためもあるのかも知れない。それでもしつこく指の愛撫を続けた。そしてややあつて。

ブラムはイレーネの体を引き離し、寝台に押し倒した。目が合う。ようやくその気になりましたか？

――淫情で濡れた瞳が言っていた。

「……どうぞ」

彼女は自ら脚を開いて見せた。白くしなやかな脚が、見事なM字を描いている。その真ん中では、散々に焦らされた赤い花卉が、卑猥な液体でぬらぬらと光沢を放っていた。

体を武器に生きてきた——そう言った彼女だが、見る限り綺麗な秘所だ。あるいは、武器だからこそ使用どころを選んできたのかもしれない。

なんにしろ、イレエネは既に挿入を心待ちにしているようだった。熱く硬い肉棒で貫かれるというのは、わかりやすく単純な……しかし正当な快感だ。

だがブラムは、ここでもまた焦らした。

「そう焦るなよ。夜は長い。俺も興が乗ってきた」  
にやりと笑い、十分以上に解されている秘所にゆっくりと顔を近づけた。

「……意地が悪いですね」

「普段はそうでもないんだがな。たぶん君のせいだ」  
不貞腐れたような言い方だったのが愛らしく思えて、ブラムは苦笑交じりの答えを返した。あまりにも反応がいいものだから、つい調子に乗りたくなるのだ。

ひくひくと淫猥な蠢きをする花卉にそつと口づけた。奥から溢れてくる淫蜜を搦め捕り、火照りきつて赤みを増している陰唇に吸いつく。

「はあ……ん。……あ、んん、んっ、あ……」

彼女は鼻にかかった息を漏らすと、それを皮切りに悩ましく喘いだ。派手ではないが、それだけに真に迫った調子。

ブラムはその声に、腹の底が熱くなるのを感じた。触れもせずに勃起が強まり、もつとその声が聞きたいと吼えたててくる。男が誰しも飼う獣の叫びだ。

従った。舌先の感覚を頼りに膣口を探り、膣内に侵入させる。目一杯まで押し込んでから、舌先を蠢かせた。

「ふうっ……ん、あ……そんな、奥まで……」

イレエネの咄きは無視して、ブラムは舌の愛撫を続けた。絶え間なく湧き出る淫蜜を吸り、熱い膣内の感覚を舌で味わう。そうしてから、今度は指を膣口にあてがった。この解れ具合ならと、縦に重ねた二本の指。  
「いくぞ」



合図して、しかし返事は聞かずに。ブラムは指を膣内に侵入させた。

「う、あつ……!!」

指の腹で淫壁を擦り上げると、イレエネははつきりと嬌声を張りあげた。同時に膣内が蠢き、侵入した指を締めつける。それを感じ取りながら、ブラムは擬似的な抽挿ちゅうそうを開始した。

「あ、ああ、く……あつ」

甘い声を漏らしながら、イレエネは腰をくねらせて快楽に耐えていた。前戯で達するのはあまり好みではないのか。

(なら、なおさらそうしてみたくなるな)

ブラムは腹の底で膨らんでいる嗜虐心に、小さく苦笑した。不思議なほど逆らう気にならない。

「ああ……膣内なつかで、擦れて……!!」

指にかき回される感覚に、彼女は気を取られているようだった。この上になにか刺激を重ねれば、絶頂まで押し上げられるかもしれない。

ブラムは判断すると、まだ触れていなかった場所

——陰核に目を向けた。わずかに皮を被って、大人しくしている。剥いて触れれば——ひとたまりもないだろう。

ゆっくりと空いている方の手を陰核に近づけた。そつと皮を剥いてやり、中の敏感な果実を露出させる。イレエネが反応した。やや焦った様子だ。

「つ……そ、そこは」

「ああ。万国共通、女の弱点だな。その様子だと魔族でも変わらんらしい」

無情に告げて、充血して震えている陰核をそつと口に含んだ。軽く吸いつき、柔らかに舌で舐め上げてやる。

「ひっ、あう、あ……っ!!」

「反応は激烈だった。一気に腰が浮き、がくがくと震え始める。絶頂に近い。そういう反応だった。だが構わず、ブラムは口の中の陰核をしつこく責め立てた。むき出しの官能の果実を散々に嚙られ、いよいよ声が大きくなってくる。」

「ああ……っ! だめ、それはだめっ。そんなの、無

理に決まつて……！ あ——」

イレーネは喚いて、しかし途中でびたりと言葉を止めた。そして次の瞬間には。

「だめ——もう、果てるっ！」

大きく仰け反り、彼女は絶叫した。腰だけではなく体ごと震えながら、ぐったりと寝台に横たわる。白い肌が一気に赤みを増していた。スイッチが切り替わったようだった。平靜なメイドから、乱れる雌になったような……そんな変化だった。

その姿はあまりにも淫猥いんわいであり——そして美しくもあつた。



「派手にいったな」

言いながら、ブラムは指を引き抜いた。すると栓が抜けた形になって、イレーネの秘所からとろりとした淫蜜が零れてくる。先ほどよりも遥かに量が多い。粘性も増したようだった。それを見やつてから、イレーネの顔を覗きこんだ。だがそれに気がついた彼女は、さつと腕で顔を隠してしまう。

「どうした。いまさら顔くらい見られても、どうつてことないだろ」

「……本当に意地が悪い。わかつてて言っているでしょう？」

「まあな」

ブラムは肩をすくめた。肌を見られることと、淫猥に蕩けた顔を見られることとは、羞恥の意味が違う。特に彼女は普段表情の変化が少ない。

それは本心を隠したがる者の特徴であり、翻つては素の顔を見られるのをなにより嫌う、ということでもある。もつとも……だからこそ見たくなるのだが。

ブラムはゆつくりと、イレーネの腕に触れた。彼女はぴくりと反応したが、振り払うような様子はない。それを確認してから、触れた腕を静かにどかした。

そこにはとろとろになったメスの顔があつた。眉が寄り、目尻が下がっている。頬が赤らみ、額には珠の汗。魔族の特徴である長い耳も先まで真っ赤だ。

「……嫌がる女の顔を見たがるなんて、最低ですね」  
彼女は蕩けたメスの顔で、そんな憎まれ口を叩いた。

無論、迫力も恐怖も感じない。ただ愛らしさだけがあら。それに——抵抗もなく腕をどけたということは、彼女とていまは満更でもないのだろう。

「そうだな。だが、君はこれからそんな最低野郎に犯されることになる。気分はどうだ？ ハッピーか？」

言いながら、ガチガチに勃起した男根を秘所にあてがった。亀頭が蕩けた花弁に触れ、くちゅりと水音を立てる。

「んふ、う……。ろくでもない気分です。ええ、本当に」

息を詰まらせながら、強気な言葉をぶつけてくるイレレーネ。だが同時に、自ら腰を揺すつてきてもいた。触れている亀頭と秘所が擦れ、ブラムにも官能の呼び水が浴びせられた。

「……でも」

イレレーネは蕩けた顔をこちらに向けた。ブラムの顔を両手で挟むように持つ。

「あなたは最低ですが——そんなあなたに貫かれたくてたまらなくなっている私もまた、最低です。お相手

ですわね」

「そのようだ。ろくでなし同士、精々仲よくいこう」

ブラムは笑って、口づけをひとつ唇に落とした。それから、細い腰を掴んで挿入の体勢を取った。

「いくぜ」

「……いつでも」

囁き合い、挿入が始まった。亀頭がずぶりと飲み込まれる。そしてそうなつてしまえばあとは容易い。一気に根元までぶち込む。熱い淫壁が絡みついてくる。暴発するかと思うほどの淫らな刺激に、ブラムは眉を寄せた。それはイレレーネも同じだったようだ。元より準備万端の女の蜜壺を一気に最奥まで貫かれた衝撃は、彼女を大きく仰け反らせていた。

「あぐ……。うあつ。いい……。気持ち、いい……。！」

白く細い腹を波打たせて、彼女は官能を声にした。鼻にかかった甘い声。男の獣性を突き刺す声だった。

表情も実にそそのものになつていた。汗の浮いた額、切なげに寄つた眉根、潤んだ瞳、力なく半開きになつた唇——どれを取っても淫乱で、ひどく悩ましい。ブ

ラムは知らず震えた。腹の底から、ぞくぞくとした感覚がせり上がってくる。女が善がれば、男もまたそれを快楽に感じるものだが——それにしても。

「……いい顔だ。これほど昂つたことは、これまで一度もなかった」

いよいよ興が乗り、挿挿を開始した。暴発しても構わない気分であり、また何度でも射精できそうな高揚があつた。

躊躇なく腰を打ち込んでいった。イレーネが一番悶える角度を探しながら、ひたすらに。

「あ……っ。それ、それいいっ。その角度で……！」

と——彼女もまた、既に快楽に溺れているようだった。躊躇いなく自身の弱点を告白して、淫らな催促をしてくる。彼女が擦られたがっている壁は、やや奥まつたところにあつた。そこだけ少しざらついた感触のある部分。こちらとしてもそのざらつきに男根が触れると心地いいので、突き込むのに否やはない。

腰を引き寄せた。狙いを定めて同じ角度で同じ場所を擦り上げる。亀頭がざらつきに擦られ、痺れるよう

な感覚が背筋を走り抜けた。

「あ、うあ、んっ。あ、ああ、あうっ。だめ——また、私だけ……！」

イレーネが限界を訴えるような嬌声をあげるが、構わず突いた。何度も何度も、しつこいほどに擦り上げる。ブラムもまた、射精感に手が届きかけていた。止める意味はなく、それが可能な状態でもなかった。このまま射精まで突き続ける。そう決めて、ブラムは更に強く腰を叩き込んでいく。

「あふっ、あ、ああつ。——あ、ああ……」

激しさを増す挿挿に、彼女は汗だくで耐えていた。首筋が心配になるほど真つ赤になり、かくんと力が抜けてきている。目はとろんと蕩けたように潤み、淫情の光をゆらゆらと湛えていた。

「あ、んんっ。う、ん……ひう、あああつ……！」

かつと、イレーネが目を見開いた。もはや限界だつたらしい。彼女はブラムより一足早く、がくがくと腰を震わせた。

「だめ、もうイク——！」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**